

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月20日現在

機関番号：34511

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720257

研究課題名（和文） 構文理論の新しい可能性の探究—Pretty 構文の分析を通して—

研究課題名（英文） A New Direction of Construction Grammar: Through Another Look at the *Pretty* Construction in English

研究代表者

南 佑亮 (MINAMI YUSUKE)

神戸女子大学・文学部・准教授

研究者番号：40552211

研究成果の概要（和文）：認知的構文理論の観点から、英語の *Pretty* 構文の下位構文として特に視覚動詞が分布する構文群の分析を試みた。その結果、(1)*look at* を基盤とする構文には対象物に関する相反する評価の存在を明示す機能があることが判明し、(2)*see* を基盤とする構文を精査するなかで *for all to see* という慣用表現からの類推で成立している事例群が見つかったことから、*for all to see* を伴う一連の構文群が存在することが明らかになった。いずれも構文理論の方法論を支持する成果である。

研究成果の概要（英文）：This study was an attempt to give a cognitive construction-grammar analysis of specific sub-constructions of the *Pretty* constructions, especially the ones with a particular verb of vision specified (e.g. *look at*). First, it was claimed that the construction with *look at* indicates one's contrasting evaluations about a targeted entity. Second, building upon the finding that a set of instances of the specific sub-construction with *see* are semantically connected with an idiomatic construction *for all to see*, it was shown that *for all to see* is composed of a cluster of constructions. Both of these results strongly support the methodology as advanced in the cognitive school of construction grammar.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：英語学

キーワード：英語、*Pretty* 構文、知覚動詞、構文理論、構文の意味、文脈

1. 研究開始当初の背景

近年急速に発展を遂げつつある認知言語学(Cognitive Linguistics)のパラダイムの中から生まれてきた構文理論(Construction Grammar)は、

- (1)「構文(construction)」という単位が言語(文法体系)の基本単位を成す。
- (2)言語使用者の知識内にありうる「構文」について、その複雑性・抽象性についていかなる所与の制限も設けず、あくまでも各単位の定着度と生産性によってのみ言語単位としての「構文」の地位が決定される。

という基本理念に基づく新しい文法理論である。この理論の下では、これまで「構文」と見做されてきた現象が実は有用性の高い言語単位を成していないことを明らかにすることや、逆に、これまでは構文という扱いを受けてこなかった現象を発掘することが可能になる。

このように豊かな可能性を内在しつつも、非常に研究される英語の中においてでさえ分析の対象となる現象が部分的なものにとどまっているきらいがあった。具体的には、動詞を述語とした、ある事象を描写した文(例: *I gave Mary a book* のような二重目的語構文)は Goldberg(1995)をはじめとして数多の研究成果が得られているが、形容詞を述語として主語指示物の属性を描写するようなタイプの文についてはほとんど研究が進んでいないという現状があった。

一方、英語の Pretty 構文という現象は、(i)にあるように、形容詞述語 (= pretty) による主語の属性を叙述した文の一種である。特徴は、形容詞述語が to 不定詞句を伴い、その to 不定詞内の動詞 (= look at) の目的語が意味解釈上、主文の主語 (= Mary) に対応することである。

(i) Mary is pretty to look at.

先行研究におけるこの構文の扱われ方は、

- (1) この構文における to 不定詞句は実質的な情報価値を持たないことを指摘すること
- (2) この構文に生起する代表的な形容詞を列挙すること

の2つにほぼ集約できる。この2点は互いに関連しており、(1)に述べられている認識が自然と「Pretty 構文は形容詞述語に基盤がある」という前提を形作り、研究者達はこの構文に生起しやすい形容詞を突き止め、そのリストを作成することに力を注いできたといえる。

2. 研究の目的

上述の背景を踏まえ、本研究は、構文理論が中心的に扱ってきた現象とはかけ離れ、かつ英語の中でも特殊な文法現象と見做されてきた Pretty 構文を取り上げ、構文理論の理念や方法論がどこまでこの現象を的確に捉えうるかを試みた。

まず、構文理論的な観点に立つと、Pretty 構文の to 不定詞の扱い方が先行研究とは180度変わり、

- (1) Pretty 構文の to 不定詞句は余剰的なものではなく独自の意味機能を担う。
- (2) 形容詞を基盤とした構文スキーマだけではなく、to 不定詞の動詞を基盤とした構文スキーマも言語単位を成す可能性もある。

という予測が導かれる。本研究は、これらの予測の正しさを、特に知覚動詞が to 不定詞句に生起する事例を題材にして検証することであった。

3. 研究の方法

構文理論における基本原理にしたがって、Pretty 構文と呼ばれる構文の事例をさらに具体性の高い構文単位に下位分類し、それぞれの構文の意味・用法の詳細な記述とカテゴリ構造の解明を目指した。具体的には、特定の知覚動詞を基盤とする構文群を想定し、大規模コーパスから採取したそれぞれの事例を意味・用法ごとに分類しそれぞれの特徴を明らかにするという方法をとった。また必要に応じて、英語母語話者にインタビュー調査をおこなった。

本研究でその存在を想定した構文群は以下のとおりである。(※基盤となる語彙項目は太字にしている)

- (ii) [(主語) be (形容詞) to **look at**]
- (iii) [(主語) be (形容詞) to **see**]
- (iv) [(主語) be (形容詞) to **watch**]
- (v) [(主語) be (形容詞) to **behold**]
- (vi) [(主語) be (形容詞) to **hear**]
- (vii) [(主語) be (形容詞) to **listen to**]

(ii)~(v)は視覚動詞、(vi)と(vii)は聴覚動詞を基盤とする構文である。視覚動詞と聴覚動詞から研究を始めた根拠は、知覚動詞の中でも特にこれらの動詞が高い頻度で用いられることと、他の感覚を表す動詞群に比して意味の拡張が起りやすいということ(すなわち、豊かな多義性を示すということ)を鑑みてのことである。もしこれらの特徴を Pretty 構文の to 不定詞句においても保持していることがわかれば、先行研究における「to 不定詞句は情報価値を持たない」という前提は明確に否定されることになるという見通しがあった。

これらの構文の事例観察にあたっては、一貫して、当該の文だけでなく、それが用いられている言語的文脈にも留意し、可能な場合はある構文が用いられる文脈のタイプも特定するという方針で作業を進めた。この方略には、構文理論的な研究においてさえも時折みられる「構文の意味=文・命題レベルの意

味」という先入観を排し、文・命題レベルを超えた「構文の意味」が存在する場合にも適切に対応できるという意義があった。

以上のように、本研究は、言語事実に対するバイアスを可能な限り排除することに比重を置きながら進められた。

4. 研究成果

本研究の特筆すべき成果は、以下の(1)と(2)にまとめられる。(1)と(2)は、3. で挙げた(ii)~(v)の構文群のうち、(ii)と(iii)に関するものである。(2)は、構文(iii)の研究を進める中で見つかった現象に関する成果である。以下、それぞれについて解説する。

(1) look at を基盤とする構文[=(ii)]には、主語が表す対象物に関する視覚に基づく属性への評価を叙述するというのが基本的な機能であるが、これが、視覚以外の情報に基づく対象物の属性と対比するような文脈で用いられる傾向があることがわかった。

例えば、次の British National Corpus (BNC)からの事例は、the cottage の見た目(外観)の良さ(=太字部分)と内部のひどい状態(=斜体部分)を対比している。

And though the cottage was **pretty to look at**, it was *rather poky inside with small, dark rooms and low ceilings*. (BNC; 太文字・斜体は筆者による)

しかし、他の属性との対比は、必ずしも対照的な評価を伴うとは限らない。以下のように、全体としては一貫して対象物への肯定的な評価を述べており、構文(ii)の述語部分は、同一の対象物が持つ他の属性と同列に並べられている。

Terracotta tiles, brick, flagstone, slate, terrazzo and non-slip ceramic *are all durable, impressive, **good to look at** and easy to clean*. (BNC; 太文字・斜体は筆者による)

調査と分析の結果、構文(ii)は、ほとんどの場合、上記の2つのパターンのいずれかに当てはまっていることが判明した。

興味深いことに、look at の意味解釈は、常に視覚領域に留まっていることである。言い換えると、この構文において look は視覚行為としての「見ること」を常に表す。これは、次第に、視覚情報とは必ずしも結びつかない場合にも、動詞 seem のように証拠性(evidentiality)を表すことができるようになってきている、[(主語) look (補語)]の構文における look とは著しく異なっていると

いえる。

以上のことから、以下の帰結が得られた。

- 先行研究における to 不定詞の情報価値の低さに関する主張は誤り
- 構文(ii)において look は視覚行為しか表していないが、これは構文(ii)の独自の意味機能である。
- 少なくとも構文(ii)については、この文単独の意味にとどまらず、使用される言語的文脈も「構文の意味」の一部を成している。

(2) 視覚動詞 see を基盤とする構文[=(iii)]を精査すると、構文(ii)の場合と同じく、多くの事例は see が視覚の意味に限定されていた。ところが、clear や plain といった明白さを表す形容詞を伴う一群の事例(The evidence is clear to see. など)に限っては、see が「理解」の意味でも解釈されている。

このいわば「飛び地」をどのように説明するかが課題となっていたのだが、調査を進めるうちに、for all to see というイディオムもまた clear や plain 等の形容詞に後続する場面があることが判明し、問題となっていた事例は for all to see の for all の部分を省略したものである[The result is clear (for all) to see.]ということが判明した。さらにそこから、for all to see が形容詞述語の直後という環境[=(a)]だけではなく、動詞述語文の直後[=(b)]や、過去分詞述語の直後[=(c)]、そして述語としての there (ごくまれに here) の直後[=(d)]に生起する場面があることがわかった。(※以下の事例はすべて The Corpus of Contemporary American English (=COCA)より採取したものである)

(a) A small, but noisy demonstration by anarchists appeared to deter the couple from posing for photographs in this street itself. But their happiness as they stood in the doorway was plain **for all to see**. (COCA; 太文字は筆者による)

(b) He held the weapon up **for all to see**, and his eyes met those of Artur Bader. (COCA; 太文字は筆者による)

(c) The chemical formulae were written right on the box **for all to see**. (COCA; 太文字は筆者による)

(d) The similarities between Platonic contemplation, on the one hand, and perceptual contemplation and its place in our lives, on the other hand, is there **for**

all to see. (COCA; 太文字は筆者による)

これらの事実から、The result is clear (for all) to see. のような事例は明らかに、形容詞を中心に構成された構文の具現事例というよりは、to 不定詞句(=for all to see)が中心をなして成立している構文クラスターのうちの一つであるという方が実態に則した特徴づけであると言える。

また、for all to see は、(a)や(d)の場合には発話者の「主張」の言語行為を伴うことができるが、残りの二つのパターンでは不可能である。この事実は、認知文法論(Cognitive Grammar)において提唱されている主体化(subjectification)という概念によって捉えられる可能性がある。構文理論における意味の記述に、主体化といった非常に複雑な概念をいかに適用するかという、これまであまり取り上げられることのなかった新しい視点が得られたというのも特筆すべき成果の一つである。

(1)と(2)のいずれの成果も、構文理論の提唱する、「構文」の柔軟な定義を土台にして導き出されたものであり、同理論が提示する事実発見の方法の妥当性を支持するものであったといえ、今後の構文理論の進展に少なからぬ貢献が果たされたといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- (1) 南佑亮 (2013) 「構文(constructions)としての慣用表現—*for all to see* の場合」 『神戸女子大学文学部紀要』第46号, pp. 31-48, (査読あり)
- (2) Minami, Yusuke (2011) “*Mary is pretty to look at vs. Mary looks pretty: Property Cognition through Visual Information,*” *Papers from the 11th National Conference of the Japanese Cognitive Linguistics Association*, pp. 92-102. (査読なし)
- (3) Minami, Yusuke (2011) “Appearances Can Deceive You: A Cognitive Analysis of the “Subject *be* Adjective to look at” Construction,” *Osaka University Papers in English Linguistics* vol. 15, pp. 51-64, (査読なし)

- (4) 南佑亮 (2011) 「事象と属性のはざま—視覚が関わる2つの属性知覚構文をめぐって」 大庭幸男・岡田禎之(編)『阪大英文学会叢書第6巻 意味と形式のはざま』223-235頁, (査読なし)

[学会発表] (計3件)

- ① 南佑亮 「複数の主体の融合と分離—subjectificationにおける『主体』の問題」 第二回認知文法研究会, 愛知県立大学サテライトキャンパス, 2013年3月23日
- ② 南佑亮 「For all to see の語法と多義性について」 英語語法文法学会20周年記念大会, 近畿大学, 2012年10月13日
- ③ 南佑亮 「Pretty 構文 (Tough 構文) における聴覚動詞について」 第25回福岡認知言語学会, 西南学院大学, 2011年9月10日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

南 佑亮 (MINAMI YUSUKE)
神戸女子大学・文学部・准教授
研究者番号: 40552211